

## 「疎外された者」と「隣人愛」 —1937年～1948年の作品にみる太宰治—

李 智 賢

本論文では、太宰が生涯の苦悩であるといった〈隣人愛〉というテーマを、太宰文学に見える疎外の問題との関連性から注目し、太宰化された〈隣人愛〉の有り様を考察した。太宰文学の登場人物は、弱者の姿勢を取りながらも秩序や制度に対する批判を発していたことから、戦後メディア等により無頼派として位置づけられた。なおかつ、戦時下は時代とは無関係に見える作品が主に執筆されたことから、時代に対するレジスタンス文学として把握されることもあった。

だが、本論文では、太宰の後期に語られた〈弱さ〉、〈隣人愛〉への苦悩を想起し、太宰の「人間」への愛情という部分に注目する。「隣人愛が自分の苦悩のすべて」だという太宰の告白は、戦中の作品等にみえる〈弱さ〉の苦悩と切り離して考えるべきではないだろう。太宰文学の苦悩の本質が「人間」にあったことを考察し、太宰文学を新しく読解することを本論文の目標とする。

第一部の第一章では『如是我聞』と『家庭の幸福』の分析を通し、太宰が自分の「苦悩のすべて」だと語っている〈隣人愛〉とは、幸福の外に置かれ疎外されている者に向けられたことであることを論じた。『如是我聞』の中で語られている「家庭のエゴイズム」の批判は、同時期に書かれた『家庭の幸福』における「家庭のエゴイズム」と同じ脈略のものであり、それは〈隣人愛〉に基づいたものとして読むことができる。太宰はその〈隣人愛〉の対象が、『家庭の幸福』にみえるように〈幸福から疎外された者〉であることを語っている。

第二章では、太宰作品において〈隣人愛〉という言葉が集中的に使われる時期に書かれた『惜別』を分析対象として、太宰が使っている〈隣人愛〉の意味を考察する。ここで、被疎外者である語り手の〈私〉は、同類の被疎外者にむけて〈隣人愛〉を感じ、親和を感じていたことがわかる。さらに、〈隣人愛〉が語られる際には〈偽善〉への嫌悪も同時に語られている点にも注目できる。

第二部では 中期の太宰文学の中に隠れている被疎外者を見つけ出し、その被疎外者を

眺める太宰の視線を具体的に考察する。

中期の時代は、日中戦争と太平洋戦争が勃発した時代背景を有し、社会体制の中で多くの被疎外者が生み出された時期でもあった。健康イデオロギーや一家団欒イデオロギーが社会を支配した時代であり、社会体制の外に置かれていた存在としての被疎外者が必然的に多く現れていた。これまで太宰の戦時下の作品は、時局に抵抗しているか、迎合しているかについて議論があったが、「人間」に集中する太宰の視線に沿って読むとき、太宰文学は時代と関係なく統一性を持って読むことができる。

第二部の第三章では、戦時下の社会事情が反映されている『東京だより』の分析を通し、これまで国策小説における作家の戦略として読まれた〈足の不自由な少女〉を、〈隣人愛〉のモチーフから読み返した。『東京だより』にある前面に押し出されていない「私」の痛みと疎外感を読み取ることにより、「私」は少女を同じ被疎外者としての痛みを共有した者としてみていたことが推察できるのである。この「私」が少女をみる視線は、本論文で語る太宰の〈隣人愛〉と深く関連する。

第四章の『雪の夜の話』においては、家庭の幸福を賛美しているようにみえる戦時下の小説に、戦後の『家庭の幸福』にみる家庭エゴイズムの批判がすでに表現されていることを考察した。

『雪の夜の話』の〈水夫の逸話〉からは、内から疎外され外に置かれているものを読み取ることができ、この構造が『家庭の幸福』の〈津島修治の逸話〉と非常に類似していることを看過できない。このことにより、表面的に家庭の幸福を賛美しているようにみえるこの小説は、後期の小説のように幸福から疎外された者を語っている小説として読むことができるのである。

次に、『駆込み訴へ』においては、太宰が聖書のユダと言う人物を再創造するとき、ユダの立場に立ち、キリストの愛から疎外されている者としてユダを造形したということを考察した。太宰はユダを、キリストに憎まれている被疎外者として見出した。この小説は、太宰の「余計者」意識を投影しているだけでなく、キリストを憧憬し求愛するユダの一方的な愛がキリストに答えられない姿も演出している。

この〈一方的に愛し、憎まれ、疎外される〉という構図は、翻案小説の『新ハムレット』からも発見される。太宰はその創作作品の中で世の中の弱者・被疎外者に目を留め、自分と同類の日陰者を見つけ出していたが、太宰が既存の作品を再解釈し翻案する過程においても、同様の視線が存在していたことを確認した。

第三部では、太宰の最晩年に書かれた作品を中心に考察した。

まず、『人間失格』を通して「世間から完全に疎外された者」である葉蔵の疎外感を考

察し、また葉蔵が様々な被疎外者たちに親和を感じ、共感する姿を考察した。『人間失格』に登場する〈隣人〉という言葉については、従来多様な解釈が存在するが、ここでは〈隣人〉が自分と同じような日陰者であることと、小説に登場する多くの被疎外者たちが太宰の〈隣人〉であることを確認した。

また、『家庭の幸福』、『父』、『桜桃』等晩年に書かれた家庭小説においては、太宰が「命をかけて」でも守ろうとした〈義〉とは〈隣人愛〉であったことを明らかにした。

後期の家庭小説に登場する家長は、家庭を忌避し脱走するような姿をみせるが、分析作品に引用されている聖句等からは家族を犠牲にする家長の苦しい心や痛み等を読み取ることができる。

このようなイロニー的な態度は『父』における「義のために遊んでいる」という表現からもみえる。さらに『わが半生を語る』における「己を嫌って、或いは己を虐げて人を愛するのでは、自殺よりほかはないのが当然だといふことを、かすかに気がついてきました」にも、太宰の自己破滅的で自己犠牲的な〈隣人愛〉が語られているのである。これらの考察を通して、後期の家庭小説にみえる〈義〉は、太宰が最後まで神の前で徹しようとした〈隣人愛〉であることを確認する。

以上のように、本論文は中期と後期文学に発見される被疎外者たちを、下降志向の観点からではなく、〈隣人愛〉の視点から新しく読解した。太宰文学にみえる〈隣人愛〉の姿は、『人間失格』の葉蔵のように、自分同様の被疎外者へ送る共感及び同情のようなもので、太宰化された〈隣人愛〉であった。太宰文学における被疎外者たちの姿は太宰自身のペルソナでもあり、太宰は自分の痛みを投射した〈隣人愛〉を描いているのである。さらに、戦時下の作品は、時局に対するスタンスの究明よりは、人間への関心という太宰文学の大きな脈絡からみることができた。

本論文は、反秩序のイメージを持たれていた太宰文学を人間の本質的な部分である〈愛〉を追求した文学として読み直した点に意義を持つ。その愛の形は聖書的な愛や、一般的な愛とは少し異なるものの、自分のような被疎外者へ救いの手をさし伸ばそうとした救いの文学として読めるのである。